

青木繁との旅 (1)

小山 多由美

佐賀県唐津市出身の母の実家に行くには片道約三時間かかる。祖父母が逝ってからは足がだいぶん遠のいたというのが現実である。

しかし、唐津へ向かうJR筑肥線は私が好きな鉄道路線の一つである。姪浜駅を過ぎて糸島の里山と畑が織りなす四季折々の緑と、交互に現われる穏やかな波に輝く唐津湾を覗き込むようにして走る列車の旅。私は唐津への旅を退屈だと思つたことは一度もない。

母の姉であるヒサノ伯母は、私と一つ違いの従兄と二人で日本三大松原として有名な「虹の松原」に近い、玉島（佐賀県東松浦郡、現唐津市）に住んでいる。玉島には万葉集にも詠まれている清流・玉島川が流れ、奥には七山が見えて、自然豊かな農村である。

伯母は一九三〇（昭和五）年生まれで、母より四つ年上

玉島に行く前に「唐津くんち」の前夜祭（「宵山」）の雰囲気味わってみたいとなつた私は、JR唐津駅で降りて久しぶりに唐津神社付近を歩いてみることにした。

駅の観光案内所で地図をもらつて、私は唐津神社までの道のりを確かめてみた。地図を見ると「河村美術館」という名前を見つけた。私は所属している水彩画のグループの会報に美術エッセイを書いているので、地元の美術館には関心がある。河村美術館は唐津神社の近くにあるので早速行ってみることにした。

夜の祭りに向けて、露天商は準備に追われていた。彼らはメリケン粉や、キャベツの大きな箱を車から降ろし、露店の中に運び入れていた。

電柱の電源にコンセントをつなげて屋台用のコンロを並べると少しずつ店らしくなっていく。ほとんどが二十代前半の若者で、茶髪やピアスの、いわゆる「ちよい悪」兄さんや姉さんたちだ。神社近くになると、白髪の男性や姉御肌の年増の女性が露店を組み立てている店もあった。若者に比べると動作が鈍い彼らは、何だか場違いな感じがして、私は思わずドキツとした。

唐津神社に着くと、時が止まったように静かな空気が流れていた。幼い頃、境内に並べられた菊の鉢（菊花展）を見に祖父に連れられて歩いた参道も、露店が所狭しと並んでいる。昔はもつと参道が広かつたような気がした。

である。文学が好きで、今でも唐津の短歌会に月に一度、玉島からバスに乗って出席している。伯母の夫（みち生）は玉島で「下尾医院」を開業していたが、昭和四十五年に胆のう癌で亡くなった。迪生が四十三歳、ヒサノ伯母が四十歳の時である。十六歳だった従姉を頭に二人の従兄弟と先代で迪生の父、迪生の母と伯母が残された。やがて勤めに出た伯母は、苦勞して子育てをした。しかし、天性の楽道家である伯母は、屈託ない笑顔が魅力的な女性だ。

幸い伯母は大病を患つたこともなく八十三歳になった。ただ、八十歳を過ぎた頃から足腰が弱つたと電話で嘆くようになり、いく分気弱になつたように思われた。そんな伯母に久しぶりに会いたくなつた私は、大勢の人で賑わう「唐津くんち」に合わせて約五年ぶりに伯母の家を一人で訪ねることにした。

十一月の最初の連休に行われる唐津神社の秋の大祭「唐津くんち」は、唐津城の旧城下町の路地を鉦や太鼓や笛の音に合わせて曳き子たちが曳山を曳く祭りである。約二百年の伝統がある曳山は、漆の「一閑張り」と呼ばれる技法で作られている。豪華で凝つた意匠の曳山は、現代に換算すると一億〜二億円は製作費がかかるといわれ、佐賀県の重要無形民俗文化財にもなっている。遠くフランス・ニースのカーニバルや韓国、アメリカなど海外の祭りにも参加している。

手洗場で手を洗つて参拝すると、神殿の横に大きな酒樽が積み上げられている。博多山笠の時期の櫛田神社を思い出した。

唐津神社の隣にある曳山展示場に入つてみると、十一番曳山・米屋町の「酒呑童子と源の頼光の兜」が展示場の外に出ている。曳山の前で五十人くらいの曳き子が神主のお祓いを受けて神妙に首を垂れていた。しばらくして、曳き子たちが一斉に動き出して、鉦、笛、太鼓と掛け声とともに曳山と一緒に走つて町内に帰って行った。

曳山展示場の売店で私は河村美術館について尋ねてみた。案内嬢は「ここから近いですよ」と言つて、さらに詳しい資料を渡してくれた。そこには青木繁の作品が二十点余り展示されていると書かれていた。

福岡県久留米市出身の青木繁の作品が、なぜ遠く離れた佐賀県唐津市にあるのか。「青木と唐津」という、意外な組み合わせに興味を湧いてきた私は、ぜひ河村美術館を訪ねてみたくなった。

青木繁（一八八二（明治十五）年〜一九一一（明治四十四）年）は、福岡県久留米市莊島町に生まれた。同郷の画家の坂本繁二郎とは、久留米高等小学校で同級生だった。明善中学の時に青木は森三美から本格的な洋画を学び、やがて単身で上京して画家を志すようになる。

西鉄久留米駅からバスに乗って石橋美術館に行くと、常

設展示室に青木の代表作である「海の幸」や「わだつみのいるこの宮」(どちらも国の重要文化財)、「自画像」(一九〇三年)の他にも彼の作品が展示されている。機会があるごとに石橋美術館で青木作品を鑑賞するのが私の楽しみの一つでもある。

さて、唐津神社からさらに浜側の道路を唐津城に向かって歩いていくと、上級武家屋敷通りが続く。「旧高取邸」と並んで河村美術館の標識も見えてきた。浜の方には佐賀県多久市出身の炭鉱王・高取伊好^{たかとりいこう}の住居で国の重要文化財の「旧高取邸」がある。炭鉱に関心を持つている私は、二年前に伯母と従兄と三人で「旧高取邸」にも行ったことがあり、懐かしくなった。

静かな邸宅が並ぶ住宅街の一角に、かまぼこ型の風変わりユニークな建物が目に入ってきた。それが河村美術館だった。

階段を四、五段昇って館内に入ると、男性の受付の方が美術館について詳しい説明を下さった。美術館の壁は、武家屋敷の垣根に使われていた「矢竹」をイメージしたものだ大きな瞳で早口でしゃべる彼の話に、受付とは思えない情熱を私は感じた。後で彼は当美術館の館長の岩瀬さんだとわかった。また、岩瀬さんは河村美術館の創業者であり、コレクターの河村龍夫の甥である。

河村龍夫は一八九三(明治二十六)年唐津市で生まれた

の「ランプ」という作品は、構図と色彩に思わず引き込まれてしまう。画面中央よりわずかに右側に置かれた数冊の本の上に古いアンティークのランプが置かれている。ランプの中心部には鈍い緑色の光が光り、そのランプとは対照的に背景の壁は暗く沈んでいる。この壁は、彼の画家としての前途を暗示しているように複雑な暗い色合いを帯びている。いわゆる「たらし込み技法」を使って背景の壁が塗られている。その壁の色が彼の深い悩みを表現しているように私は思った。彼は「絵画」の中に自分を表現する技法を見出していく。以後、このランプの光のように、彼の作品は次第に光を増して徐々に輝き出す。油絵では表現できない繊細な心の不安を、青木は見事に水彩画で表している。

一方、彼の油絵の作品も存在感がある。「筑後風景」と

いう題の作品は、解説によると「佐賀平野の風景」とも考えられているという。収穫時の黄金色の田んぼに作業をしている農夫と画面いっぱい秋の空が描かれているが、どんよりした灰色の空の上に思いきってこげ茶を重ねて、収穫の喜びと不安を見事に表現している。

青木自筆の手製の百人一首は、彼の書も添えられ、力強くしなやかな筆運びに私は目を見張った。歌に合わせたコマカットの挿絵も大胆な構図と色彩で、彼の遊び心が満載されている。また、扇に描かれた絵は神話の世界の女性だが、彼のセンスと豊かな発想に驚かされた。

実業家である。彼は芸術に対しても造詣が深く、特に青木繁の作品の収集家でもあった。また、「新郷土」(昭和三十八年八月・九月号)に「青木繁と佐賀」という論文を寄稿している。彼は青木繁の研究者の一人でもある。

館内は、ヨーロッパの七宝焼きの部屋、ドイツのビールジョッキの部屋、日本画の部屋、青木繁常設展示室という四つの小さな部屋に分かれていて、二階のロビーには佐賀県出身の画家たちの絵が飾られている。

青木繁常設展示室の部屋は石橋美術館にあるような大作の作品はない。しかしながら、小品だが質の高い青木の作品を鑑賞することができる。

「働く人」「小諸宿外」などの鉛筆デッサンは、彼の繊細で確実なデッサンを堪能することができる。また、「絵葉書」は、小さなハガキサイズの中に、複雑な柄模様の一見芸者風の三人の着物姿の女性が琴を弾いたり笛を吹く様子が描かれている。そのうちの一人が彼の恋人の「福田たね」である。観光用に彼が描いたと言われる「絵葉書」は、青木の遊び心が存分に楽しめる秀作だと思う。

この部屋の中でも目を引くのは、二点の水彩画である。どちらも東京美術学校に入った十代の頃に描かれた作品だが、思わず立ち止まって見るほどの魅力がある。一枚は上半身裸体の自画像であるが、その鋭い眼光と見事な骨格の描写に彼のただならぬ才能が感じられる。また、もう一枚

ハガキサイズから六号サイズまでの小品が集められた常設展示室は、河村の優れた見識と鑑識眼を見せつけるものである。私は今まで知らなかった青木の細やかな心の琴線に触れた喜びで、胸がいっぱいになった。青木は、一般的に無頼派で自意識が強い放浪の画家と言われているが、恥ずかしがり屋でおしやれな感覚を持ち続けた、繊細な画家の一面を私は発見した。美術館で頂いた青のパンフレットの表紙になっている若い青木の肖像写真でも、彼は柔和な表情を浮かべている。ハガキやカルタなどの小品の中に、私は今まで感じたことがなかった青木に対する親しみを持った。

展示室の青木作品の中で私が最も感動したのは「夕焼けの海」という作品である。

この作品は、彼が療養中に西唐津の海で描いたと解説にあった。当時の石炭を積む帆船が画面左側に風を受けて帆が落ちかかっている。帆船の影が暗いグレーの色調で描かれて波の上で揺れている。その様子からずしりと船の重さが伝ってきた。帆船は夕陽の光の中で暗く重い存在感があり、死の予感を感じさせられる。一方、帆船の回りの波は逆に明るく朱色に輝いていて、むしろ生の喜びにあふれているようだ。また、左側の帆船は、右側後方に見える二つの船と絶妙なバランスで配置されている。

風を受けて帆が今にも下りてしまいうような帆船こそ、病

に蝕まれていた青木自身を表しているのではないだろうか。夕焼けに輝いている海と、病に苦しむ己を思わせる帆船を描くことで彼のその時の心象風景を映し出している。彼の置かれている厳しい経済的・体力的限界を考える時、冷静に自己を分析する彼の驚異的な精神力と、それを絵画の中に投影させる卓越した表現力に、私は絵画の持つ魅力に改めて畏敬の念を抱いた。

再び十代の終わりに描かれた「ランプ」の絵と比較してみると、興味深い点に気付くことができる。

「ランプ」の場合は、背景の壁は暗く沈んでいたにも関わらず、己を投影したと考えられるランプは、鈍い緑色の光を放っていた。つまり、青木を取り巻いている周囲の状況は彼が望む通りのバラ色の世界ではなかったかもしれないが、己は一筋の希望の光を放つ才能があることを自分で確信していたような気がする。

一方、「ランプ」から約十年後の「夕焼けの海」に描かれた帆船、つまり二十代後半の青木は、十代の「ランプ」の時代と比べると正反対の状況に置かれている。光り輝く夕陽の中で肝心の帆船が風にあおられ、まさに沈没しようとしている。生命の危機を彼は敏感に感じている。青木は何とか唐津まで足を延ばして療養できた喜びをかみしめて、一人の画家として自立して生きていく自信を持ったのだろう。そのことを彼の絵は物語っているような気がした。

泳いでいたと聞いている。

昔の海と比べることはできないが、海辺から遠い山沿いに住んでいる私は、新鮮な気持ちで浜に点在する松と唐津城、西の浜をみつめた。

さらさらとした砂浜を歩いていたら私は、ふと身をかがめて桜色の貝を拾った。私は小さな貝殻をそっとビニール袋に入れた。

一九一〇（明治四十三年）年、二十八歳の青木は佐賀県小城町に東京の画塾と一緒に学んだ平島真を訪ねて逗留した。徐々に体が弱っていく青木を、平島が尽力して療養のために唐津へと向かわせた。

青木はこの唐津の海を眺めてつかの間の休養をとり、絵を描き続けた。最晩年の作品として重要な「朝日」と「夕焼けの海」、「虹の松原」はこの唐津で仕上げたと言われている。

明治時代、近代化の波を受けて石炭の積み出し港として栄えた唐津。国民学校三年生だった伯母は、上海から虹の松原を訪れたアメリカ人に茶を点てるために、傘模様の細の着物を着て「海賓ホテル」を訪問した。そのときの写真が伯母のアルバムに残っている。

心身の静養と制作を続けた青木繁を、唐津の温暖な気候と静かな海が優しく迎えてくれたのだと思う。

私と青木繁との旅は、この唐津から始まるうとしていた。

「夕焼けの海」から人間的に成長した画家・青木繁の成熟を私は感じる事ができた。必死の思いで帆船と夕焼けを描いた彼の気迫が彼の絵から伝わってきた。

深い感動に浸って美術館を後にした私は、青木が療養のために滞在したという木村旅館（現「渚館きむら」）を訪ねてみた。

「旧高取邸」の前を通り、約二百メートル唐津城に向かって歩いていくと、湾の浜辺にひっそりと木村旅館は建っていた。創業百年を超える老舗旅館は、何度か建て替えて繰り返して昔の面影はなくなっていたが、青木繁と共に歌人斎藤茂吉も訪れており、浜に下りると茂吉の碑も見つけることができた。私は旅館に立ち寄って宿の方にお話を伺った。

「この旅館は青木繁ゆかりの旅館と聞いていますが」と私が尋ねると、受付の方は、

「そうなんです。当時、青木繁は何枚か絵を残していかけたけれど、無名の画家さんと思ってこちらで処分したと聞いています。まさかこんなに有名な画家になれるとは」といかに残念そうに言われた。

旅館の側を通り抜けると西の浜に出ることができたので、私もしばらく砂浜を歩いてみた。遠浅で穏やかな唐津湾の波の音が快く感じられ、私の高ぶった心も少しずつ静かに慰められていく。この西の浜で、約七十年前に伯母や母も



河村美術館 (0955-73-2868)